



日本記者クラブ記者会見

動物園は「生命」を伝える

小菅正夫
旭川市旭山動物園長

2006年12月1日

page 2

動物園は文化活動

page 3

ゴリラのすごさを知れ

飼育係の立つ位置

page 4

「エキノコックス」でマスコミと激論

page 5

命の「入れもの」

猛獣の「行動」に悩む

page 6

ヒョウがいない！

pages 7

オランウータンはなぜ動いたのか？

page 8

人間の生きる意味を教えられる

pages 9-14

質疑応答

社団法人日本記者クラブ

このような席でお話しさせていただける機会がまさか私の人生で来ようとは、全く思いもありませんでした。どういう風の吹き回しか、最近いろいろな方から非常に注目をさせていただいて、いろいろな賞をもらうたびに、私は何を褒められているのかよくわからないというのが実情です。「日経BP賞」をいただいたときも、優秀賞の方はまさにものすごい仕事をされているわけですね。私、最後に「大賞です」と言われて、壇上に上がっていくのが非常に恥ずかしかったんです。

動物園は文化活動

また、きょうは「菊池寛賞」といわれて、「菊池寛賞」の意味すらもわからなくて、最初に電話をいただいたときも、あれっ、私、何かそんな文章を書いたかな？私が書いているのは北大柔道部の観戦記しかねえなと思ひまして、あんなのが評価されるはずはないと思っていたんですけれども、全然違って、賞は文化全体を対象としているそうで、動物園が文化活動の一つだといわれたことは非常にうれしかったですね。

動物園が文化活動の一つであるということは、私たち動物園の人間がずっと言い続けてきていることなんです。社会の多くの方からみたら、動物園というのは「子供たちが行く遊園地を含んだ遊び場でしょ」というようなことをいわれる傾向があったような気がするのです。それが「そうではない。文化の一翼を担っているのだ」というふうに評価されたんだよ」と言われて、すごくうれしかったですね。

うちの動物園は昭和42年にスタートしまして、いま、日本動物園水族館協会に入っている動物園は95あるのですけれども、その中で一番北にある動物園なんです。昭和42年のときに、旭川のイメージは、非常に寒くて積雪地で、冬の間ずっと耐えて暮らしている。それで春が来て、子供たちに、短い夏の間だけでも動物とともに、とにかく楽しく暮らせるひとときをつくりましょうということで、旭山動物園がつけられたそうなんです。当時の市長、五十嵐広三さんがつくった動物園なんです。最初のときは本当に市民の方は喜んでつくったんですよ。

日本の動物園で、旭山動物園のでき方というのは非常に珍しいんです。まず、青年会議所が「どんなものが必要ですか？」というアンケートをした。そうしたら「動物園」が圧倒的に多く、その次に「遊園地」とか「植物園」があったのだそうです。それで当時の市長さんが、それじゃあ、子供たちが遊べる動物園、広々として植物がたくさん植わっていて、遊園地もある動物園をつくりましょうと言って…つまり市民の要望でつくられた動物園だったんですよ。

スタートしたときは、非常にたくさんの人に来ていただいて、それから十数年、多くの人に利用されて、楽しんでいただいて、見守られて、ずっと半年の開園をやってきたんですね。

それが、1980年代に入って、もしかしたら日本人の社会的な活動が変化したせいかもしれないんですが、うちの動物園ばかりでなく、動物園というものへの入園者数が、全体としてだんだんだんだん減ってくる傾向にあったのです。そんな中で、旭山動物園をどうするかということで、さまざまなことを考えてやってきたわけです。ただ、それは動物園というものはお客さんが入ってくれるということが最低の条件であるということからスタートしていることなんですね。まずお客さんが入ってくれなければだめなんだということで、動物園の本質で行くんじゃなくて、お客さんが来るようなイベントをたくさん打って、お客さんを呼ぼうというようなことをやってきたんです。それはいま考えてみたら、非常に小手先のことだったと思うのです。それをやると、一時的な評価は上がるのですけれども、その後、結局はお客さんの数は減ってくるのです。

どんどん入園者数が減ってくる中で、僕たちはずっと現場にいて、実際に動物のことを一番よく知っているつもりでいたものですから、動物園をどうやってやればいいのかということ、当時からずっと現場で話してきたのです。そんな中で、世界の動物園の動きだとか、これからどうあるべきだとかいうことを皆で話してきて、それで、だめになってきたときに、たまたま私は係長になって、「おまえ、どうするんだ？」といわれて、「いや、私はこういうようにしてやりたいんだ」といったんです。何を

やればいいのかということなんです、これは、現場を歩いていたらよくわかるんですね。

ゴリラのすごさを知れ

うちにはゴリラがいたのです。北海道で初めてゴリラが入ったのは旭山動物園なんですね。ゴリラというのは、まさに地球規模での希少動物であって、すばらしい魅力的な動物で、それが旭川市の旭山動物園ににいるということはすごいことだと僕は思っていたんです。そこへ幼稚園の子供たちがやってきて、ゴリラのゴンタに向かって、「ゴンタ、ばかやろう」というんですよ。「おまえたち、何でばかやろうっていうの?」と聞くと「ゴンタはばかだ」とかいうんですね。とにかく人間が一番偉くて、人間以外の動物はみんなだめなんだというイメージを子供たちが持っている。ゴリラの何たるかを全く知らない子供たちが、ゴリラをばかやろうという。それを聞いているゴリラの悲しそうな顔を思い浮かべない。本当につらい顔をする。それを僕はずっと見ていたわけですよ。何でおまえらはばかやろうと言うのか。じゃあ、1対1で戦ってみろよ、勝てるはずないだろうと思うんですね。変な言い方ですが、私ですら勝てないんだから。

とにかくそういう感じだったんですよ。これは、人間どもがちょっといい気になり過ぎているんだから、とにかく野生動物というのはこんなにすごいんだということをしっかりと思い知らせなければだめだ。地球上から野生動物がどんどん減少しているのは何が原因なのか?人間が野生動物を尊敬してないからだ。何で尊敬しないのか?もしかしたら、動物園で彼らと対峙したときに、「何だ、あいつら、ぐずぐずしやがって」とか、子供がそういうふうに見ることが大きな原因になっているのではないか。ということは、野生動物を救わなければならない動物園の人間が、野生動物のすごさをしっかりと伝えないから、こういう現象が起こる。これは、将来的には野生動物にとってマイナスのことをやっている。おれたちは、その逆をやればいいんだということなんです。野生動物のすごさとか、野生動物に感動して「これはすごい動物だなあ」ということを子供た

ちがみんな思ってくれば「その野生動物が絶滅していくのに、黙って見ていられるの?」といったときに「いやいや、そうはいかんでしょう。あのすごい動物たちをみんなで救いましょうよ」というふうになってくれる。そこに動物園の大きな役割があるのではないかというようなことを、ずっと話してきたんですね。

飼育係の立つ位置

一方で、お客さんは「何だ、あの動物たちは」というわけですよ。これは我々にはちょっと耐えられないことで、じゃあ、どうしてこういう現象が起こるのか考えたときに、実は僕たち、動物園の飼育係は動物の裏側にいるんですね。皆さん、ちょっと動物園のことをイメージしてください。動物園に行っても、飼育係は全然みえないでしょう?なぜかというと、彼らは動物の裏側にいるからなんです。

動物にとって一番気にしなければならない人間というのは僕たち、飼育係です。えさはくれるし、掃除してくれるし、なおかつ、僕は獣医ですので、僕が来たら危険なこともあるわけですね。時たま変な針がぼっと飛んできて、チクッとしたと思ったら急に意識がなくなって、気がついたら変な薬を飲まされていたなんていうことがあるわけですよ。だから、動物たちはずっと僕らの方をみているのです。つまり僕たちがこっちにいと、動物はこっちをみるから、お客さんに対して尻を向けている状態になるわけです。いくらお客さんに「ほら、すごいだろう?」と言ったって、これはだめですよ。

それじゃあ僕たちがお客さんと動物の間に入ればいい。お客さんとの間に入れば、とにかく動物は我々を見るわけだから、必然的にお客さんの方を見ることになるわけですね。で、動物たちは我々、飼育係に対しては非常にアクティブなんです。警戒もするし、何かやろうと思ったら、やらせる方法は何ぼでもあるのです。警戒させてもいいし、例えば好物でちょっと呼んでもいい。いろいろなことができるわけです。そうすると、それを見ているお客さんは非常に喜ぶんですね。

とにかく、普段はぼうっとしているキリンですが、

我々が差し出す木の枝なんかを食べるときには、顔がずうっと目の前に来て、舌がビューッと長く伸びてきて、木の枝をくると巻いて、スルスルッと葉っぱだけとって食べる。そういう様子をみれるわけです。そうしたら、あら、キリンはああやってえさを食べるんだ！ということがわかるんですね。

そういうことを我々はやっていくのだと。そうしたら、きっと、旭山動物園に来たみんなが、動物のそれぞれの味方になってくれる。動物の味方をふやすことが、結局野生での彼らを保護することにつながるのだということで、私たちは飼育係チームとして、そういうことをずうっとやってきたんです。でもお客さんの数はなかなか目にみえて増えるということではないんですよ。これは厳しいものです。でも、我々がいろいろなことをやっているということは、一部の方たちには少しずつ浸透していたのではないかという気はします。

そこで、実は旭山動物園にものすごく大きな危機が訪れたんですよ。あの大事な大事なゴリラ、これからほっておいたら滅びるかもしれないゴリラが、エキノコックス症にかかってしまうわけです。エキノコックスはもともと北海道にあった病気ではなく、北方系の寄生虫なんです。もう北海道は全部定着してしまっています。本来はキツネとネズミの間で行き来する条虫の仲間です。キツネには何の害も及ぼさないのですが、それが中間宿主であるネズミや我々のところに入ると、それが原因で肝機能不全を起こして死んでしまうという条虫なんです。ゴリラがその条虫症にかかって死んでしまったのです。

「エキノコックス」でマスコミと激論

マスコミの方は、エキノコックスというものについて多分全く知らなかったと思うのです。私が全部公表して、例えば潜伏期の話なども含めて説明してもエキノコックスがあたかもコレラのような伝染病であるかのごとく報道されましたね。

ゴリラが死んでから、私がエキノコックス症だと断定するまでに、3カ月ぐらいかかったんですよ。これは難しいです。エキノコックスだということを断定してから、市役所の中で対策を練るのに徹夜で

3日間やりました。そしたらマスコミには「3日間隠していた」と言われましたからね。「いや、隠したんじゃないくて、例えば対策をしないで公表したら、皆さん、それこそ、どうするんだ、どうするんだといって、私が答えられなかったら話にならないじゃないですか。でも、多分10年前に感染したことを、その対策に3日間当てて、何か不都合があったんでしょうか？」というわけで、記者会見を開いて記者さんと激論を交わしたら、私のことをぼろくそに書かれました。旭山動物園はエキノコックスで汚染されて非常に危険な動物園であるというイメージが、バーッと広がってしまったんですよ。

どうしようかと思ったんですが、何にも隠さずに全部正直に話しましたからね。そうしたら、だんだんわかってきてくれて、各報道機関の方も、いや、あの対策は正しかったんだというようなことを後でフォローしてくれてことなきを得たんです。

ただ、お客さんが減っていったときに、そういう事件があったのですが、それでも旭川市はやめようという判断をしなかったんですよ。多分あのときに、市長には2つの道があったんですよ。これを理由にやめてしまう。これが一番楽だったと思うのです。それでなくたって、お客さんが減ってきて、もうだめかもしれないといわれていたわけだから。

しかし、翌年「おまえが園長をやれ」といわれて、私が園長になったんです。そして「おまえはどう考えてるんだ？」と言われて、私は、動物園というのはこういうことだとお話ししたら「じゃあ、やってみる」という話になったわけです。それで、私たちは野生動物の姿かたちをみせるのではなくて、魅力的な行動そのものをみせるのだ、すばらしい能力をみせるのだということで、「行動展示」「能力展示」でやっていくということを考えたのです。「旭山動物園は命を伝える動物園である」ということで、新しい形の展示をスタートさせました。

最初につくったのは、行動展示とは全く関係ない「こども牧場」。何でこども牧場なんだというのだけれども、要するに命の問題なんですね。「命」という「言葉」を伝えることは簡単なんです。「命は大切だ」と口で言うことも簡単。しかし、命そのものを伝

えることはできないのです。言葉では伝わらない。
「命」という文字や言葉は伝えることはできるけれども、命の意味はわかりません。これは教えることはできない。でも、一人一人は、必ず命というものをどこかで自分自身の中に埋め込んでいるはずなんです。じゃあ、どういうときに埋め込むのか。私は、命というのは、命との触れ合いからしか認識できないと思っているんですね。いまの子供たちというのは、そういうことを経験できる場が失われてきている。だから、動物園でこそ、それをやっていかなければならない。そのためにこども牧場をつくって、そこで直接動物との触れ合いを通して「命」というものを感じてもらおうと思ったわけです。

命の「入れもの」

どうやるか？簡単なんです。命あるものを直接だっこしたり触れ合ったりすることによって、命の意味というのが体や心の中に詰め込まれていくのだと私は思っているのです。それを感じてもらってから、その命というものは、実は入れものの中に入っているときだけが命なんです。入れものから出てしまったら、先も前もわからないわけです。この命の入れものというのは、実はたくさん用意されている。人間だけじゃない。オランウータンにも命が入っている。アシカにも入っている。アザラシにも入っている。すべての生き物が命の入れものなんだということ。命というのはさまざまなものの中に入って、それぞれが輝く命というものを体現しているんだ。命がある間だけ入れ物は光り輝いているということ。を、私たちはやっていきましょうということで、さまざまな動物舎をつくってやっていかせてもらっているんですよ。

最初に「もうじゅう館」をつくったときに考えたのは「命の入れもの」というのはたくさんあるということです。猛獣がいるジャンルの中にもたくさんある。しかし、その命の入れものをはぐくむ環境については、1つの命に1つの環境が用意されなければならない。例えばライオンのいる自然環境とトラのいる自然環境は違うんです。いままでの動物園は箱の中に入れていたから、ライオンとトラをひっく

り返して入れても全然違和感はなかった。いま旭山動物園でも、上野動物園でも、どこの動物園でも、ライオンとトラの入れものを逆に入れてしまったら変なんですよ。アフリカのような雰囲気のところへトラを入れたら、ぴたっといかない。人工ですけれども、トラのいる環境の中にライオンを置いたら、やっぱりおかしいんですよ。そのように、生き物は自然環境の中でジグソーパズルのようにしっかりとまるように存在しているのだということも、しっかりと伝えようと思いました。

猛獣の「行動」に悩む

それと、何か行動的なものを伝えようと思ったときに、一番苦しんだのは猛獣なんです。動物は目的のない行動はしません。すべての動物は目的のある行動だけをする。では動物が行動する目的は何か？それは一つには食べ物を探してとることであり、もう一つは、生殖行動。これしかないんですよ。それ以外に彼らは行動しません。そうすると猛獣が一番困るんですよ。なぜかというと、猛獣は生きた動物を襲って殺して食べるわけですから、それを動物園で展示するというのは、我々の業界ではタブーなんです。絶対やっちゃいけない。

しかし皆さんテレビを見ても、動物園で見てもネコ科動物というのは、何か襲って食べているとき以外は寝ているじゃないですか。でも「寝ていちゃだめだ」といわれている動物園ですから、じゃあ、起きて何かさせようと思ったら、生きた動物をやるしかない。これは困るわけです。

そこで、我々が考えたのは「生きた動物を殺して食べる場所を見せるわけにはいかない。だめなのはだめ。じゃあ、寝方だよな」ということです。どうやって寝ているところをみたら、皆さんは「これはすごい」といつてくれるかというところをみんなで論議したんですね。ライオンとトラというのは、とにかく一番強い動物だから、地面で堂々と寝る。ここがポイントなんです。地面で堂々と寝ていて文句をいわれるのは何故か？それは、遠くで寝ているから文句をいわれるんだろう。目の前で寝ていたらどうか？おなかが動いているのもわかるし、たまに

はあくびもするし、寝返りを打ったときだってドキッとするし、とりあえずゴロンと寝たら、巨大な体を見たってびっくりするんだから、とにかく目の前で寝てもらうことが一つだ。

それから、ヒョウなんかは、テレビでみたら、獲物をとって疲れたなあというときは、高い木のうえで、両手両足をだらっと垂らして、ぐたっと寝るじゃないですか。「あっ、ああやって寝るんだよな。あれ、真下から見たらおもしろいよね」ということなんです。皆さん、テレビの世界でも、真下からは絶対見れないですよ。なぜかといったら、車がある真下に行って撮った途端に、ヒョウは逃げていきますから、これは絶対自然では見れないです。

でも、動物園ですからね。じゃあ、ヒョウが登れるような木をつくろうと。ヒョウが寝ているところに、お客さんが「すみません、入れてください」と入って上を見たら、これはきっとおもしろいよなという話になって「よし、思い切ってそのように作ろう」と。木を作って、その下に金網を張って、そこにお客さんを入れてしまおうという話なんです。

そこで問題なのは、その木に登ってくれるかどうかということでした。登らなかったらさまにならないなあと思ったけれども、動物には「習性」というものがある。「学習」じゃないんですよ。要するに、ああいうところで寝たら安心できる動物がヒョウなんです。習性というのは生来的に持っているものです。だから、理論的には絶対行く、大丈夫だというわけで、どんどん工事が進んでいったんです。

そしたら、担当者が「園長、これは絶対来ないわ。だって、手の届くようなところで、人間が何するかわからないんですよ。それをどうしてヒョウがここに来るんですか？」と言うから「いや、習性だから」と。「習性だからって…園長、絶対来ませんよ」「いや、そんなこと言ったって、来ると思うんだがなあ」と言って、実は私もドキドキしながら、ヒョウを出す日を待っていたんですね。

初めてヒョウを出した日のお話をしましょう。皆さん知らないでしょうけれども、動物園というところは、とにかく動物というのは外へ出て、必ずお部

屋に入るということをやらないと、絶対成り立たないところなんです。出っぱなしだったら、万が一のときにどうしようもないじゃないですか。必ず朝出勤して夕方帰るということを、習性のごとくやらなければだめなんです。出しっぱなしにしておいたら、一回やったら癖になって、二度とお部屋には入りませんから、必ず入れるわけです。

ヒョウがいない！

それを、ライオンをやって、トラをやって、順番にやってきて、ヒョウの番になった。夜10時過ぎて真っ暗だったんですね。うちの飼育係がみんなヒョウを見に行き、ライトをつけたらヒョウがいないわけですよ。「あっ、ヒョウがいない！」という話になって「逃げたんじゃないか？」というやつがいて「おまえ、ばかか。逃げるはずないだろう、絶対に」と言ったんですが、いないという話ですよ。で、みんながライトを地面にばかり当てていた。そのうち、上から照らしたのが、私のところをひよっと照らしたら、ヒョウが私の頭の上で、私の方を黙って見ていたんです。一言声をかけてくれればいいのに…。これも習性なんです。習性って怖いもので、そこにずっといたわけです。というわけでヒョウの頭上展示というのは見事に成功したわけです。

我々人間がどうのこうの考えるよりも、習性。習性というのは「習い性」と書くわけですが、習ってなくてもやるのが習性なんです。学習じゃない。そういうものをしっかりと我々はやっていこう。だから、種として持っている行動をやる、これがテーマなんです。個体が訓練して訓練してやれる行動ではなくて、種として持っている行動をやるということ。それが旭山動物園の行動展示です。

初めてもうじゅう館を見ると、皆さんびっくりします。頭上展示をやったのは、多分世界でうちが初めてなんです。そのときに「こんな近くで、うえからおしっこしたらどうするの？」とか「うんこしたら困るでしょう？」と言う人もいたのですが、絶対それはないです。ネコですからね。ネコというのは、皆さん、ご存じのとおり、地面に行き、穴をあけて、そこで失礼して、ぱっと隠してしまう。ネコバ

バというのは、そこから来ているんですけども。それがネコの習性なんです。絶対あそこではしない。だから、これは絶対心配ないですね。

それをやって、これはなかなか良かったぞということで、次はさる山をやって、ペンギンをやって、その次がオランウータンでした。オランウータンというのは実は動物園では非常に展示が難しい。特に行動展示というのは難しい。なぜ難しいかというと、オランウータンというのはもともと動かない動物なんです。カリマン島でもスマトラ島でも、一生懸命えさを探さなくても、手の届くところにえさがあるんです。だから、もともとオランウータンは動きません。野生で見えていても、動くときは、えさを探しに行くときか、雄だったら雌を探しに行くとき。雌だったら、たまに雄を探しに行くとかというときに動くわけです。だから、ただただ高い塔をつくったとしても、多分動かないだろうというのは頭の中にありましたね。目的を与えなければだめだ。目的は何か？先ほどいったように、食べることが子供をつくることしかない。

それで、とにかく高い17メートルの塔を二つ作って、間にロープを張ったんです。一つの塔にえさを置いて、もう一方の塔には置かなかった。そうすればオランウータンは、えさのない塔からある塔へ空中散歩をするのではないかというわけです。そのアイデアを出した途端に市役所が私に何を言ったかというところから「落ちたらどうするんだ？だれがどう責任をとるんだ？」と言うんですね。何度も「落ちたらどうする？」と言われるものだから、私は「いや、落ちたらオランウータンは死にますよ」と言ったんです。市役所の人「いや、オランウータンが死ぬじゃなくて、オランウータンの真下に人間がいるんでしょう？」と言うんですね。私は、ヒョウがうまくいきましたから、頭の真上でオランウータンをみせたいんだといって、そこに人が入れるようにしたんです。「人がいたらどうするんですか？」「いや、万が一落ちたとしても、16メートル上から落っこってくるんだから、人は逃げますよ」と言ったら「そういうことじゃ責任をとれない」という話で、安全冊をつけたらどうだとか、いろいろなことを勝

手に言うんです。私は「絶対落ちないと」言っていたんですが、だれも信用しませんでしたね。

オランウータンはなぜ動いたのか？

私が一番心配したのは「落ちたらどうしよう」ということではなくて「登らなかったらどうしよう」ということです。登らなかったら、お金をかけて塔を作ったのがしゃれにならないなあと思ったんですけども。私は、とりあえず動物学上彼らが過って落ちることはありませんという話をしました。しつこくしつこく話した。そこでようやく皆さん納得はしたけれども、それじゃあ、絶対落ちないのかというと、それはないんですよ。「絶対」というのは世の中にはないですからね。

例えば心筋梗塞というのは突然起きるわけですよ。そうしたら、パタッと落ちてきますからね。それから、渡っている途中に脳梗塞が起きても……。そういうことを想定したら、ああいうものはできないですよ。だから「過って落ちることはありません」と言っているんですが。

さてオープンの日が来て、市長さんから、議員さんから、みんな来て、さあ、オープンしますというときに、何の訓練もなしにオランウータンがひょっと出てきたんですよ。オランウータンは上をみて、ああ、高いなあと思って、もちろん全然行かないわけです。そしたら、市長さんが「園長、これ、本当に行くの？」と言って「いや、多分行くと思いますが…」という話をしたんですけども「でも、もう30分たつのに、まだ行かないな」と。で、僕に小さい声で「園長、これ、もしも行かなかったら、むだな公共事業っていわれるんだからね。責められるのは僕だから」と言うんです。「いや、何とか行くようにします」という話をしたんですが。

新聞記者の方は各社来ていましたし、テレビ局も全部来て、みんな見ているんですが、オランウータンは絶対行こうとしないんです。で「園長、きょう、行かないですよ。私たち、帰りますから」と言うから「ああ、ご苦労さまでした。あなたが帰った途端に行くかもしれませんよ」といったら、皆さん、帰らないで見ていたんですよ。

どうして行かないかという、オランウータンというのは非常に慎重な生き物なんです。慎重だから落ちないんですよ。つまりだれか登ってやればいい。そういう話をうちの飼育係にしたら、だれも私と目を合わそうとしないんです。そのうちに、調子のいいのが私と目が合って「おっ、行く？」と言ったら、「行きます」と言って、飼育係が登っていくわけですよ。登って行って、バナナを1個ぽっと置いてくるんですね。そうしたら、雌がそこまで行って帰ってくるんです。「おまえ、もうちょっと上へ行け」と。また、もうちょっと上へ行って帰ってくるんです。「どうせなら一番上へ行け」といったんです。で、一番上へ行ったんですよ。そうしたら、リアン(オランウータンの名前)も一番上へ行って、今度は帰ってこないんです。なぜかという、こっちの塔で別な男が、大好きなブドウをみせているわけです。オランウータンはブドウが大好きなんですよ。ああ、ブドウへ行きたいなあと思っても、踏ん切りがつかないんです。

だんだん時間が過ぎて、1時間半過ぎて11時半。うちの飼育係に「おまえ、16メートルのところへ行っただから、あとは同じ高さを平行移動するだけだから、地面歩くのも一緒なんだから、ロープを歩いて行ってこい」といったんです。そうしたら、絶対行かないというんですよ。絶対行かないというけれども「おまえが行けば、リアンは行くんだよ。そしたら、みんな喜ぶんだから、おまえ、行ったら？」というんだけど「そんなにいうなら、園長、行ってください」といわれて「おれは行けないなあ」と言って…それで、こちらのブドウのランクを上げたんです。最初はデラウエアという小さなブドウだった。「ブドウを大きくしよう。巨峰ならどうだ」といって、巨峰を見せた。そうしたら、オランウータンのリアンちゃんが、手を打ったんでしょうね、ああ、巨峰なら行こうかといって、2時間後に、ゆっくりゆっくり慎重に渡ってきたんですよ。あれは8000人ぐらいいましたかね、大拍手・大歓声でしたよ。

それで1回行ったんですよ。そしたら、もう何もありませんから、何度も行ったり来たりするように

なった。そして、オランウータンの空中散歩というのが、旭山動物園の評判を非常に高くしてくれました。これも「習性」なんですよ。訓練とか全く要りません。

その後、広島動物園からジャックという20歳の雄がやって来た。体重140キロですよ。私はこれは絶対渡らないと言ったんですよ。野生のオランウータンは100キロぐらいしかないので。まして、動物園生まれで、動物園育ちで、高いところなんか登ったことないオランウータンが行けるはずがないと思った。

ところが、私の動物をみる目はちょっと浅かったですね。私がえさを見せようと、何を見せようと渡りませんでした。雌のリアンがたった一言「あんた、行かない？」といったら、何と140キロのジャックは、30分かけてロープを渡っていったんですよ。そのときは、さすがに私、これは手がしびれて落ちると思いまして、落ちたらおれが受けとめるのかと思って、冷や冷やしながら真下にいたんですが、全然問題なく渡ってくれまして、それからもどんどんやっています。

人間の生きる意味を教えられる

でも、一番すばらしいのはここからなんですよ。僕は、オランウータンというのは非常に不活発で、活動的でない動物だと思っていた。間違えていましたね。旭山動物園のオランウータンは、いろいろなことをして、物すごく活発です。そういうふうにして、非常にエネルギッシュな生活をし始めたら、見事に子供ができました。日本国内ではたしか3年ぶりの子だったんですが、それはモモという名前をつけた。そして、その子はちゃんとお母さんが育てて、いま、1人でロープを渡るようになったんです。

そういうようにして、動物本来に近いような暮らしをしっかりとさせてやる事ができれば、希少動物といえども繁殖をしっかりとしてくれるし、一生懸命子供を育てている親の姿を多くの人に見てもらうことによって、人間の生きる意味というのをもう一度考えてもらうきっかけになってくれればいいなあと思うんです。

もう一つ、このすばらしい動物、すでにカリマン島とスマトラ島にしかいない、この数少ないオランウータンが、我々人類とともにいつまでも地球上にあり続けることができるようになればということ、多くの人が望んでくれるようになればいいかと我々は考えています。さまざまな動物のすばらしい活動的な姿を皆さんに見ていただいて、動物に対する思い、それから、それをはぐくんだ環境に対する思いを、それぞれの人が心に抱いて動物園を去ってくれることが、結局は野生動物のためになるのではないかということを念願して、我々は動物園をやってきました。

この考えが伝わっているかどうかわかりませんが、本心にわざわざ遠いところから旭山動物園にたくさんの人が来てくれるようになりまして、我々職員も非常に喜んでますし、それが旭川の経済的なことにも貢献できるとすれば、私たちにとって、こんなありがたいことはありません。ましてや、考えてもいなかった、こういうすばらしい賞をいただけることになって、みんな大変喜んでるというのが素直な気持ちです。

質 疑 応 答

柳沢（文化放送）旭山動物園は何度かみせていただいたんですけれども、アザラシがアクリル柱のところへ入ってきますね。あれは、わざわざ呼んでませんよね。呼んでないのに、どうして入ってくるのでしょうか？

アザラシの好奇心

小菅 アザラシという動物は、ものすごく好奇心の強い動物なんです。それで、どうしてあそこに入っていくかというと、周りに人がいるからなんです。人がいなければ来ません。行ってもおもしろくないから。結局、そこにいるお客さんが、アザラシが通ると、みんな「ワーツ」とか「キャーツ」とかいう。それを見に来ているんだと思うんです。

アザラシというのは、陸上では非常に警戒して、人に対して、どちらかといったらおどおどしている

動物ですけれども、水に入った途端に立場は逆転するのです。

僕は現場にいるところに、スカンクの赤ちゃんを親が育てなかったんで、当時、私は人工哺育をやっていて、やっぱり野生味のあるスカンクに育てようと思ひましてね。私は親ですから、私の後をついてくるわけですよ。園内を十分散歩させまして、その後、スカンクはよく泳ぐものですから、泳ぎも教えなきゃいかんと思って、最初は浅いペンギンのプールで泳がせたんですね。私が水に入っていくと、スカンクの赤ちゃんも一生懸命入ってくるわけです。もっと深い、厳しい、大きな動物のいるアザラシのプールでちょっと泳ぎを鍛えなきゃいかんということで、私はアザラシのところに入ったんですね。

そうしたら、陸上にいるときには私を警戒してパージと逃げたアザラシが、私が水に入った途端に寄ってくるんです。そして水の中に入ると、彼らは圧倒的に人間よりも自分たちの方が能力はうまいということを知っているんですね。ひげでさわってくるんですよ。全身ボディチェックを受けるわけですね。ああ、そうなんだと思って陸上に上がったって、もう彼らは私にはついてこない。そういう経験をしていて、ああ、アザラシというのはすごい好奇心が強いんだなあ、水の中にいけば、自分の世界にいけば、彼らは人間なんかどうとも思っていないなあというふうなことが頭の中にあっただけですね。

それで、あれ(アクリル柱)を考えたときに、もちろん私がひとりで考えたんじゃないです。うちの動物園はみんなで考えるんです。うちの飼育の方から、やっぱり深くなきゃだめだと。どうせ深くするんだったら、お客さんのところにあれを縦に入れよう。というのは、ペンギン館で、あのチューブを横に使ったんです。ペンギン館は、ペンギンの世界に人を入れたんですよ。今度は逆で、アザラシなら人の中に入ってくるんじゃないかといひて、あれをつくったんですね。

それで、入ってこなかったら、またしやれにならない。でも、絶対入ってくると確信していました。なぜかといひたら、ゴマフアザラシは流氷とともに北海道にやってくるんです。そうすると、彼らは海

底でえさを探す。息づきができないから、結局、流水のすき間を縫って縦に上がってきて息をついで、また水に潜るわけです。こういう動きをするわけですね。そのすき間のところに入っていきのだから、このぐらいのすき間は絶対入ってくる。ましてや、おかしい人間がワーワーやっていれば、絶対来るに違いないと思っていた。オランウータンは行くのに2時間かかりましたけれども、アザラシを入れて、僕らがこうやって手を振って、こっちに来るのに1時間もかかっていませんね。来たら、向こうから黙って見ている。だから、きっと彼らは、人間が何をやってるか、見に来ているんだと思うんですね。

その証拠に、お客さんが帰って、だれもいないときにそうっと行くと、絶対いません。僕が行って、僕に気がつくと、ひょっと入ってくるんですね。で、じろっとみている。だから、多分、あれはアザラシにとって何か楽しみなんだと思うんですね。

最近、アザラシも人が多いことに飽きてしましまして、人が多いとそっけなく行ったり来たりするんですが、たまに例えばテレビの撮影かなんかがあって、ライトをたいて、テレビカメラかなんかやって、こちらでカチャカチャやっていると、それをアザラシが黙って見ているんですね。だから、マスコミの人が来て写真を撮ると、いいところが撮れたりするんです。ふだんは、ちらっとみて、ああ、きょうは何もないなあと上がっていったりする。

吉岡孝修（北海道新聞） 今後の行動展示の計画について教えてください。それから入園者の中で、本州、あるいは外国の方がかなりいらっしゃると思うのですが、そこら辺の話をおうかがいできればと思います。

小菅 私が園長になった翌年に最低入園者数を記録したときは、26万人のお客さんだったんですね。ただ、そのときに、市役所はだめだ、だめだといっていましたけれども、それでも26万人のお客さんが、旭山動物園に何らかの期待を込めていらしてくれているわけですよ。26万人というのは、考えたらすごい数字だと思います。26万人もの人が旭山動物

園に来てくれているんだから、とにかく我々のやっていく方向というのは決して間違いでないと言って、ずうっとやってきている。まだ途中なんですね。

ペンギン館の「衝撃」

ただ、そんな中で、ペンギン館で、ペンギンの中にお客さんを入れたということで、何か皆さんが衝撃を受けたんじゃないかと思うんですね。ペンギン館までは少しずつお客さんが上がってきたんだけど、ペンギン館のときにガーンとお客さんがたくさん来るようになりましたね。

ペンギン館で一番びっくりしたのは、男の人の態度ですね。旭山動物園に来る人でいうと、子供が「キヤーツ」と言ったり、女性が「あら、すごいね」とは言うのだけれども、一緒に来る男の人は何か感動的でないんです。男の人は、いかにも嫌そうに、きょうはおまえらを連れてきてやったんだというような顔をしているわけですよ。みんなが「お父さん、すごいね」といったら、「なんだライオンじゃん」とかいう感じだった。あるとき、ペンギン館の水中トンネルに、50歳ぐらいのお父さんが、おもしろくなさそうに入ってきたんですよ。子供とお母さんがキヤーキヤーいっているのをみて、自分が入った途端に「オーツ」といったんです。あっ、男の人の声を初めて聞いたと思ひましてね。

マスコミの人も「ペンギンがこんなにすごい生き物だと思いませんでした」とか「ペンギンて、鳥だったんですね」とか言い始めて…。動物園を広めてくれたのは間違いなくマスコミの人なんですよ。いろいろな番組で、いろいろな角度からうちの動物園を取り上げてくれましてね。

うちの動物園についての放送をやっている途中に電話がかかってきたこともあります。「あした行きたいんだけど、どうやって行ったらいいの?」と。「どちらですか?」といったら「広島だ」といわれる。皆さん知らないでしょうけれども、北海道に北広島というところがあるんです。昔は広島町といった。「ああ、広島でしたらJRで…」と言うと「えっ、JR?時間かかるだろう。飛行機だ、飛行機」とおっしゃる。「えっ、もしかして広島県ですか」

と言ったら「そうだ、広島だよ」と。「それじゃあ、東京で乗り継ぎされてきたらよろしいんじゃないでしょうか」といったんですが、何と放送された翌日に広島から、お客さんが来るようになったんです。

福岡から日帰りも

本当に信じられなかったけれども、福岡からご夫婦で日帰りで見えた人がいます。東京経由で旭川空港に来て、タクシーで動物園へ来て、タクシーを待たせて、1時間半ぐらい園内をみて、出ていくときに、うちの守衛に「いやあ、びっくりした動物園だった。園長によろしく伝えてくれ」といって、その方は帰ろうとした。「すみません、お名前を」といったら、「いやいや、おれは別に園長と知り合いじゃないし。ただ、よかったよ」と言われて、「どちらから?」と言ったら、「福岡だよ。いまから行ったら福岡に帰れるんだ」と。「えっ、日帰りですか!？」と言ったら「うん、日帰りで来たんだ」と。結局、僕はお会いしてないんですよ。すごい人がいるなあと思うけれども、そういう人が少しずつふえてきたんです。

本州の方もそういう方が来て、最近は観光バスでどんどん人が来るようになりました。ことしの夏休みの12~16日の間は「夜の動物園」というのをやったんです。夜間動物園は20年前からやっているんですが、その期間だけ、アンケート調査をやっているまして、それでみたら、何と44%が道外の人なんです。道外の方がたくさん来てくれて、1日最大のバスの台数は260台でした。

そんな状況になって、私ども、心配しているのは、それまでそんなにたくさんお客さんが入ったことがない動物園ですから、何もかにも足らなくなって、来たお客さんがご不満に思って帰られるのではないかとことなんです。

それと皆さんわりと短時間で来られるんですね。できれば、旭山動物園は一日いていただきたいんです。とにかく一日いていただいたら、満足していただける動物園だという自信はあるんですが、2~3時間だとあっちへ行ったり、こっちへ行ったりしているうちに終わってしまうと思うんですね。いろい

ろなところでやっているんで、できればゆっくりと時間をかけて来てくれたらいいんだがなあと思うんです。

多分ことしは280万ぐらいは行くんじゃないかというような予想は立てているんですが、これがこのままずっと続くなんで、だれも思っていない。天下の上野動物園でも330万ぐらいしか入らないんですから。330万というと、世界で何番目かの入園者数なんです。旭川でそれをずっと維持するなんていうことはとても考えられないので、多分だんだん落ちては来るでしょうけれども、とはいっても、我々としては、まだ道半ばなわけですから、これからしっかりと動物園づくりをやっていかなきゃならないなあと思っているんです。

「水」で世界とつながる

そんな中で、やっぱり私たちが伝えたいのは、命そのもの、それと、命をはぐくむ環境ということなんです。実はペンギン館をつくるときも、最初はペンギンをやらせてくれと言ったんじゃないんですよ。私が市長さんや議会の皆さんにお話ししたのは、旭山動物園は旭川にありますから、旭川が世界と直結しているということをしっかりと伝えましょうということなんです。そのためには、何で直結しているかということ、水なんです。地球は水の惑星ですよ。だから、水というものを介して、すべての地域はみんな一つのものになって、地球は一つだということです。旭川というのは石狩川の上流にありまして、旭川の自然を大事にすることによって、石狩川という非常に豊かな川を維持できるんですね。川が豊かであれば、海は磯焼けを起こすことなく豊かな北海道の海になって、その周りで暮らすアザラシも当然豊かな恩恵を受けるわけです。アザラシが北の海で豊かに生きれば、それと連続しているホッキョクグマも、当然いい自然環境の中で暮らしていけるわけです。そうすると、深層海流でつながっている南極にも好影響を与える。

だから、人々が野生動物を救うというのは、何も現地へ行って、オランウータンを救うために植樹したりすることではなくて、旭川の自然を大事にする

ことが、実は川を通じて地球全部につながっているのだから、結局、地球を守ることになるんです。野生動物を守るためには、何も特別なことは必要ないのであって、足元の自然を大事にしましょうというメッセージを旭山動物園から発信します。そのために、ペンギン館をつくってください、ほっきょくぐま館をつくってください、あざらし館をつくってください・・・で、だんだん旭川に近くなって、このあとは「石狩川水系の生態館」をつくれれば、これでようやく私のスタートした水系展示の完了なので、今後はそこをしっかりとやっていきたい。

「生命教育」の場に

もう一つ、動物園というのは、非常に大きな環境教育、生命教育の場だと思うのです。そのためには、しっかりと伝える、教育的な活動をやっていける組織づくり、それも重要だろうと思うのです。だから、できれば、そこで授業ができるぐらいのしっかりとしたレクチャーの施設があって、そこへ組織がしっかりとあって、そういうことの活動ができることが、旭山動物園がこれからもずっと使命を果たしていけるようになるためには必要だろうと。だから、将来の展示ばかりではなくて、人的な配置も含めて、教育的な機能を充実するというのが、今後の旭山動物園にとって非常に大事なことだというふうに考えているんですね。

丸尾寿一（フジテレビ出身） 2つ質問があります。

1つは、これから何か新しい動物を導入するお考えがあるのかどうかということ。もう一つは、職員の人材の育成といいますか、地元の方が来ているのか、あるいは全国から希望者が集まっているのか、職員の教育、募集事情についても教えていただきたい。

オオカミのすばらしさ

小菅 新たな動物の導入ですけれども、石狩川水系の生態館というのは、これはまだまだ構想自体をしっかり固めなければなりませんし、また、もう一つ、設備するのに多額な費用を要すると思うのです。人もそこで雇わなければならないということがありま

すから、これは簡単にできるとは思っていません。もちろん私が園長でいる間にはできません。構想だけがあるわけですね。

そのほかに、私は新たな動物としてはオオカミを展示したいと思います。「何でオオカミなの？」といわれるんですけども、実はオオカミについては、皆さん、あんまりいいイメージを持っていらっしゃらないんですね。子供たちに聞くと、オオカミというのはずるがしこいですとか「オオカミのような男」と呼ばれて喜ぶ人間はいないとか「送りオオカミ」だとか、何かあると「オオカミのような男」だとかいわれる。

でも、それは恐らくヨーロッパ文化の影響だと思うのです。日本では、オオカミは昔は神様のように慕っていた動物だと思うのです。名前がオオカミ(大神)ですから。それから、漢字を書いてみてください。けものへんに「良」と書いて「狼」。いい動物だったんです。我々、稲作民族にとって、オオカミは絶対にいい動物。何故かとうと、北海道はいま、エゾシカ被害に困っていますよね。我々、稲作民族にとって、一番の敵は実は草食動物なんです。シカに荒らされる、イノシシに荒らされる。そういう動物を食べているのが実はオオカミ。だから、オオカミがいさえすれば村は豊かになった。だから、よい動物。

エゾオオカミは人間が殺した

ヨーロッパは狩猟民族です。そのヨーロッパでは「赤ずきんちゃん」とか「オオカミと七匹の子ヤギ」とか、古典的なヨーロッパの童話で動物が出てくるやつは、すべてオオカミは悪い役なんです。私も必死になって調べて、最近ようやくオオカミを善玉にした絵本をアメリカで1冊みつけたんですけども、それ以外は、古典的なやつはすべてオオカミは悪者です。これはやっぱり民族性の違いだと思いますね。明治時代に外国からいろいろな文化が入ってきたときに、その文化と一緒に取り込んでしまったんだと思うんですね。だから、オオカミという動物をしっかりと伝えていかなきゃならん。いいか悪いかというのは、大体人間が勝手に決めることですからね。先ほどいったオオカミが「よい動物」というのは、

人間にとってよい動物であって、シカからみたら「とんでもない動物」という話になるわけですから。

オオカミはどういう暮らしをしているのかとか、どういうものかわからないうちに、実は日本ではオオカミは絶滅しているわけです。北海道のオオカミが絶滅したのは1900年です。実際にはもうちょっと前ですけども。ニホンオオカミは1905年ですよね。ちょうど100年ちょっとたっているわけです。ニホンオオカミはどうして絶滅したかというのははっきりしません。例えば狂犬病が入ったとか、いろいろなことが言われていますが、本当のところはわかりません。しかし、エゾオオカミだけははっきりしているんですよ。人間が全部殺してしまったんです。

野生動物とつき合うときに、そのときそのときの利害関係だとか、そういうもので対応していくと、こんな間違いを犯してしまうということを、動物園はしっかりと残しておかなければならない。そのためには、オオカミをしっかり飼って、オオカミのすばらしい家族愛だとか、集団としてのオオカミの生き方だとか、本当のオオカミの姿をお客さんにしっかりとみていただいて、解説して、そのオオカミを、北海道人の我々の先輩が酪農に役に立たないという理由だけで、たった30年で絶滅させてしまったのだということを、やっぱり記憶に残しておかなきゃならん。そのためには絶対オオカミは飼いたいと思っているものですから、次は何としてもオオカミをやってくださいということを、ずっと市役所をお願いしているんですけども、去年も落ちましたからね。ことしもまたお願いするんですが、ことしはつければいいなあと思っているんです。

オオカミというのは、皆さんが思っているような動物ではなくて、物すごく気持ちも細やかですし、愛情深い動物ですし、家族愛に至っては、あの家族意識とか集団意識というのは見事なものです。

もう一つ、人材ですけども、うちの動物園の体制は、獣医は一般公募します。全国からどこでも受けることができます。飼育の方は、これは市の政策として、市役所が地域限定で選んだ人の中からうちに来るんです。だから、うちは、動物園に対する意

識の強い人だとか、そういう人を選んで飼育係に採用するわけではありません。しかし、うちへ入ってから、みんな動物の代弁者に育っていくんですよ。「どんな教育してるの?」とよくいわれるんですが、何にもしてないですね。結局、それは動物の魅力だと思うんですよ。自分がこの動物のために何かしてやらなきゃならないという思いになっていくんじゃないですかね。

1年だけがんばれ!

私が園長になったときなんですが、うちに配属された男が、3日目に私のところに「辞めさせてください」といつてきたんです。「辞めるって、動物園を辞めるの?」「そうです」というんですね。「動物園に来て3日目に辞めるということはどういうことなの?」って聞いたら、「いや、とてもこういう仕事はできません」という。「どうしてできないの?」といったら「いや、僕はもともとギターのバンドをやっているんで、土日とそのグループでいいことかコンサートがあるんで…動物園は土日休めないし、祝日も休めない。僕はこういう仕事は合わないんです。動物も好きでないし」と言ったんですよ。

で、私は「わかったよ。でも、3日目でやめるということは、どういうことかわかってるの?おまえ、社会人だろう。おまえが3日でやめるということは、おまえを雇った市役所の人事課の面接した男がばかだということを、おまえは言ってるんだよ。こんな男を採ったのかって。だって、試験をたくさんの人が受けて、その中から選ばれたわけだから、3日でやめたら、そいつに対してどう申し開きするの?それよりも何よりも、あの園長、ばかだからっていわれるんだよ」という話をして「最低でも1年がんばりなさい。1年後には絶対やめていいから」といつて、私は1年の約束で彼にいろといっただけです。そのかわり、1年後にはしっかりとやめさせてやるからといいつて、私はその準備をしていたんですね。

そして、やっているうちに、秋が来て、冬になって、当然僕は辞めると思っていますから、新しい人を採用しようと思うわけですね。で、そいつに確認したんです。「おまえ、辞めることでいいんだよね?」

といったら、「何を言ってるんですか、園長は。だれが辞めるって言ったんですか」「おまえ、入って3日目に、おれに辞めるって言ったじゃないか」「いや、そんな、ちょっと記憶ないです」というわけで、本人は絶対辞める気はないというんですよ。「辞めるなんて、冗談じゃないです。僕は絶対辞めませんよ。首にできるものならしてください」って…なかなかそれはできませんよね。で、本人は結局いついちゃったわけですよ。いまや、うちの動物園の飼育の中核をやっているんですね。非常にいい仕事をしていますし、絵もかけますし。

そんなやつばかりなんですよ。その次に入ってきた女の子は、私が市役所からもらい受けて車で園内に来る間、私の後ろの席で泣いていたんですよ。「どうしたの?」といったら「私、どうして動物園に勤めるようになったのかわかりません。絶対にできません。私『動物、好きか?』と聞かれて『はい、うちで猫を飼っています』って言っただけなんですよ」といって泣いているんですよ。で「私のうちからここまで来るのにバスがないから、私、通勤できないからやめます」というんですね。でも、その近くから通っているうちの職員がいたから、その人に「すみません、行き帰り送ってくれます?」といったら、「いいですよ」という話になって、「何でもないよ」と…何か理由をつけて、辞めたい、辞めたいと言っているわけですよ。

動物が職員を育てる

その子も、半年ぐらいたったら、もうお客さんの前で動物の話をしているんですよ。「これからお姉さんが動物の話をします」といって、びっくりしたのは、胸を広げて手を入れて、「ここにフクロモモンガがいます」といって出すんですよ。何と、ここで動物を飼っておるんですよ。で、出したときに、うんことかおしっこが出て「あら、垂れちゃった」とかといって、そして、それを解説するんですよ。若い18歳のお姉ちゃんが胸元から動物を出したら、お客さんは目が点になってみるじゃないですか。彼女はそれに蛇を持ってきて、蛇の解説もするんですよ。

数カ月前に泣きながら「動物園なんか、私、できません」といったのが、そう変わるのとは、教育とかそんなものじゃなくて、直接動物とかかわるような暮らしをしていくと、どんどん動物の魅力に吸い寄せられていくんだと思うんですね。うちの職員をつくっているのは、うちの動物だと思うんです。私どもは何にもやっていませんもの。

でも、考えてみたら、私もそうなんですね。私は動物園へ入りたくて入ったんじゃないくて、自分の話をするのはおかしいですけども、就職先がなくて。私はずうっと柔道をやっていて、卒業もできない状態のところを、何とか卒業させてもらって、就職をどうしようかと考えたときに、就職先もなくて、困ったなあといったときに、クモの糸のように垂れ下がってきたのが旭川市旭山動物園だったんです。あ、動物園か、行こうかなと、ひよっとつながって、そのまま動物園の世界に入ったんですね。

私の意識としては、すぐ辞めるというのは無礼になりますから、3年間だけはしっかりと、どんなことがあっても辞めまいと思っていましたが、3年どころか、ことして30何年動物園にいますけれども、いまだに僕は動物園が好きですし、動物のことはいまだにわからないことだらけです。多分、みんな僕と同じで、動物にどんどんどんどん吸い寄せられて、いや、こういう動物はなくしちゃだめだよなと思うから、この動物のためにできることは何かと考えたら、その動物はこんなにすごいんだということをお客さんに伝えて、お客さんに、お願いだからこの動物を守るような暮らしをしてねというふうに、やれといわれなくてもやっていくんですね。

僕は、たまに「もぐもぐ」での解説を聞いているんだけど、本当に「ああ、そうか、そうだったの」って、僕が知らないことまで彼らはどんどん勉強して、お客さんに伝えているんですよ。そういう意味では、すごいなあと思うんです。うちの職員もすごいなあと思うけれども、そういう気にさせるのは、やっぱり野生動物の魅力だと思うんです。だから、うちは決して職員教育だとか、何か特別なことをしているわけじゃないんですよ。

文責・編集部